

マグロを獲る！

波村仁太郎

「オヤカタノ トモヅナガ キレタ」(親方の※ 鱧網ともづなが切れた)

一九五一年(昭和二十六年)九月、一つの電報でんぽうが、串木野くしきののの海に向かつて打たれました。

鱧網りょうとは、船と港をつなぎとめておく大切な網で、船にとっては文字通りの命網いのなるみです。漁りょうに出ていた船の上で電報を受け取った漁師りしたちは、すぐに、「親方」の身に何か大変たいへんなことが起きたことを悟さとりました。漁師にとって親方は、尊敬そんけいできて頼たよることもできる、自分の親おやのような存在そんざいだったのです。

【波村仁太郎】



(写真提供 波村貴氏)

【鱧網】

船をつなぎとめるための網。ここでは、親方の命の網という意味。

※ 一八八九年(明治二十二年)の町村制施行ししこうに伴いともな、串木野村となった。

「いったい、親方に何が起きたのだろう。だいじょうぶなのか。」
親方の身を案じ、多くの漁船が、ぞくぞくと串木野漁港へもどつて
きました。

串木野の数多くの漁師たちの尊敬と信頼を集めた、この親方こそ、
串木野をマグロ遠洋漁業の港町として発展させ、「マグロ遠洋漁業
の父」と呼ばれた、波村仁太郎でした。

仁太郎は、一八七六年（明治九年）、※串木野村（現在のいちき
串木野市）の漁師の家に生まれました。当時の串木野村は、今のよ
うに立派な港や防波堤もない、小さな※船だまりがあるだけの村で、
台風の時などは、船の避難場所にも困り、多くの船が被害を受けて

【関連年表】

一八七六年 誕生

一九一七年

発動船を購入。

一九一九年

トロール漁業を行う。

一九二四年

はえなわ漁業を行う。

一九三七年

串木野漁港の工事完成。

※ この後も何度かの工
事が行われ、現在の港
になっている。

一九五一年

第三種漁港指定。

同年 死去

いました。中でも漁師の家は、波にのみこまれそうな危険な場所に建てられているものが多く、その生活も貧しく苦しいものでした。

十歳になった仁太郎は、※家の生活を助けるために、小舟に乗って沖で※一本釣りの漁業をはじめました。食べることに困る日々の中で仁太郎は、串木野に広がる青い海を見ながら、「どうしたら、豊かに暮らせるようになるのだろうか。」と、いつも考えていました。けれども、そんな中にも魚の獲れる量は年々減っていき、串木野の漁師達の生活は、ますます厳しいものになっていきました。

仁太郎が二十歳になったころ、漁師たちは、七時間以上かけて、はるか遠くの朝鮮半島近くまでサバ漁に行くようになっていました。仁太郎もこれに加わり、小さい船を手で操って漁に出かけて

【船だまり】

自然の地形などを利用して、波や風雨を避けて船をとめる場所

※ この当時は、授業料の負担などにより、半数以上の子どもが学校に通っていなかった。

【一本釣り】

一本の釣り糸で魚を釣る漁法。

いしましたが、何時間もかけて海に出ていると、急に海が荒れ、転ぶくしそうになったこともたびたびありました。そうやって命の危険にあうたびに、仁太郎は、「漁師たちが、もっと安心して漁に出られる方法はないだろうか。」と考えるようになりました。また、何時間もかけて漁に出かけても、魚の新鮮さが保てず高く売れないこともあり、生活は少しも楽にはなりませんでした。

二十歳の後半になった頃、仁太郎は串木野の漁師たちを集め、「発動船を買おう。*発動船だったら、遠くの漁場にも早く行けるし、今よりもたくさん魚がとれる。その上、新鮮なうちに魚を港に運べるし、海が荒れてもすぐに港に帰ってこれる。」

※ 一九七七年（昭和五十二年）ごろから、世界の国々は、各国の海岸から二百海里（およそ三七〇キロメートル）以内の範囲での外国の漁船の活動を制限するようになった。



【発動船】

エンジンの力で動く船。

と目をかがやかせながら相談しました。

しかし、これを聞いた漁師たちは、みんな難^{むずか}しい顔をしました。

「仁太郎さんの考えは、すばらしい。しかし、発動船みたいに高いものは、とても買えるはずがない。」

結局^{けつぎよく}、その場では誰^{だれ}も相手にしてくる人はいませんでした。

しかし、仁太郎はあきらめませんでした。

「みんなで協力^{きょうりょく}すれば、なんとかなる。発動船を取り入れて魚の獲^とれる量を増^ふやしている港もある。発動船を買うことは、漁師みんなのためになる。」

仁太郎は、何度も何度も漁師たちを説得^{せつとく}して回りました。

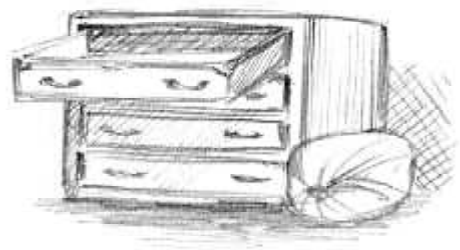
串木野の漁業の発展のためには発動船が絶対^{ぜつたい}に必要^{ひつよう}だと考えた仁

太郎は、自分がみんなに手本を示しめそうと、今までよりもさらに働はたらいて、切りつめた生活をし、かせいだお金をたくわえました。

そんな生活を何年も続つづけた後、その財産ざいさんをすべて使って、仁太郎は、やっと中古の発動船を手に入れます。この時、仁太郎は四十一歳になっていました。発動船を買ったあとの仁太郎の家のタンスは、空っぽになっていたといいます。奥おくさんの着物も全部売ってしまっただけでした。長年苦く勞ろうをしながら自分の信念しんねんに従したがい、やっと手に入れた発動船の前に、仁太郎は、

「よし、これで串木野の漁業も変かわるぞ。」

と、力強く奥さんの手をにぎりしめ、涙なみだを流しながら叫さけびました。



【考えてみよう】

ここまで仁太郎が頑がん張ばれたのは、どのような思しいからだろうか。

仁太郎の考え通り、仁太郎が手本を示した発動船での漁業は、徐々に串木野にも広まり、発動船の数もどんどん増えていきました。

また、仁太郎は、手に入れた発動船を使って、新しい漁にも挑戦しました。四十三歳のときには、鹿児島県で初めて「※トロール漁業（ひき網）」を※玄界灘で行い、水揚げ量を増やしていきました。

しかし、串木野の漁港の発展につれ、仁太郎は不安な気持ちになりました。

「漁船も大型化してきている。これからは、もっと発動船の数も増えてくるだろう。そうになると、安全に船を留めておく港がたりなくなる。今のうちになんとかしておかなければ。」

もう仁太郎の心には、「串木野の港を近代的な漁港にする。」と

【トロール漁業】

トロール網という網を使用する底引網漁業。



【玄界灘】

福岡・佐賀両県の北西に広がる海域。

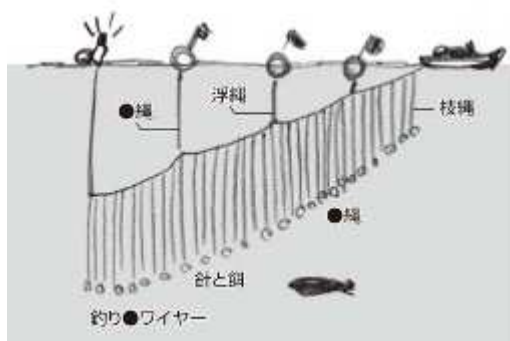
いう、新しい夢が生まれていたので。

そこで仁太郎は、同じような考えをもつ仲間とともに、港の改修工事を實現するための行動を始めます。しかし、ばく大な費用がかかる港の改修工事は、簡単なものではありませんでした。仁太郎は、県へ何度も何度も足を運び、

「どうしても近代的な港が必要なのです。」

と強く訴えました。そうして思いは実り、仁太郎が四十四歳の時、ついに県議会で、港の改修工事を行うことが決定されたのです。

それでも仁太郎は、串木野の漁業の将来を考え続けました。そうして四十八歳の時、今までの漁法だけに頼ってでは、これ以上の発展はないと考えた仁太郎は、新たに発動船による「マグロ」は



【はえなわ漁業】
長い縄に、目じるしとなる浮きを付けて海に沈め、枝縄の先のつり針の餌で魚をとる漁法。

えなわ漁業」に本格的ほんかくてきに力を入れ始めたのです。

こうして、数々のアイデアを粘ねばり強つよく実現し、串木野漁業の新たな道を切り開いた仁太郎のことを、いつしか串木野の人々は、「マグロ遠洋漁業の父」と呼ぶようになりました。

一九二一年（大正十年）から始まった港の改修工事は、その後十七年間をかけて、立派な串木野漁港を完成かんせいさせました。仁太郎は、完成した漁港をじっと見つめながら、漁師仲間に、

「これで串木野の漁業は安心だ。船がどんなに大型化しても、こんな立派な港があるのだから。みんな安心して漁ができる。」

と静しずかに語りかけました。仁太郎は、六十一歳になっていました。

【マグロの寿司すし】



遠洋漁業の南方基地きちとしてゆるぎない港となった串木野漁港は、一九五一年（昭和二十六年）、全国の漁船が利用りようできる漁港として国から指定を受け、さらに発展を続けました。冒頭ぼうとうの「オヤカタノ トモヅナガ キレタ」の電報が打たれたのは、この年のことです。まるで指定を見届みとどけたかのように、同じ年に仁太郎は、七十五歳の生涯しょうがいを閉じたのでした。

仁太郎の功績こうせきをたたえた記念碑きねんひが、串木野漁港がよく見わたせる恵比寿神社えびすの境内けいだいに建てられており、今でも串木野の人々から大切にされています。記念碑の中で、仁太郎は目の前に広がる青い海を眺めながながら、串木野の漁業を見守り続けていることでしょう。

【現在の串木野漁港】



【仁太郎記念碑】



【調べてみよう】
仁太郎たちの努力どりよくは、今の私たちの暮らしと、どのようなつながっているだろう。